

どうたく 銅鐸をつくっていた集落 からこ かぎ 唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡では、弥生時代中期中頃から後期はじめ頃にかけて、銅鐸などの青銅器を製作していました。遺跡からは、銅鐸などを製作するのに使われたとみられる土製の「いがたそとわく鑄型外枠」がみついています。裏面に把手が付き、2個一対の型をあわせるための印もあります。この外枠の内側に「まね真土」とよばれる精良な粘土をはりつけて内型と文様を刻み、銅鐸をなどつくっていたと考えられています。

銅鐸の鑄型外枠には、大・中・小の大きく3種が確認されています。特に30cm台の銅鐸をつくっていたとみられる小型の外枠（全長40.4cm）は、ほぼ全体形がわかる2点1対が出土しています。また、中型の外枠は40cm台のもの、大型の外枠は50cm台の銅鐸を造っていたとみられます。

大型の外枠は全長63.4cmあります。銅鐸を研究している難波洋三氏なんば ようざうによると、大和で製作されたとみられる銅鐸に石上型があるものの、現在知られているものは高さ60cm前後あるため、唐古・鍵遺跡で出土した大型の外枠でも石上型銅鐸の製作は難しいとのことでした。いそのかみがた

唐古・鍵遺跡発掘60周年を記念して1996年に橿原考古学研究所附属博物館で開催した「弥生の風景」という特別展では、大型鑄型の内側に石上2号銅鐸の文様をあてはめた復原品を製作しています。現在、片面が橿原考古学研究所附属博物館で、もう片面が唐古・鍵考古学ミュージアムで展示されていますが、外枠から少しはみ出る形で真土を貼った想定となっています。かしはらこうがくけんきゅうじょふぞくはくぶつかん

唐古・鍵遺跡でつくられたと断定できる銅鐸はいまのところ不明です。今後の発掘調査で石上銅鐸が製作できる大きさの鑄型外枠が見つかる可能性もあり、また唐古・鍵遺跡でつくられた銅鐸が今後みつかることもあるかもしれません。今後の発掘調査と研究に期待したいところです。



唐古・鍵遺跡から出土した銅鐸の土製鑄型外枠
右上が大型銅鐸鑄型



石上2号銅鐸（奈良県天理市出土 宮内庁所蔵）
をあてはめた大型銅鐸鑄型外枠の復原品